Photographic Society of
Zone System
ゾーン・システム研究会会報
発行日：98' 8/25
発行者：中島　秀雄
編集部：　内田順
編集レイアウト：篠原　康之
vol 11

CONTENTS

・第三回ファインプリント展をめざして
・竜串撮影会雑感
・ゾーンシステム・テクニカルアドバイス
・ルース・バーンハート＆イモジン・カニンハム写真鑑賞会
・Information

PHOTO　中島秀雄

第三回ファインプリント展をめざして

残暑お見舞申し上げます。会員の皆様にはいかがお過しでしょうか。第三回ファインプリント展が、１０月２８日から１１月７日に渡って開かれる予定になっています。過去２回の展覧会では、多くの方々からおおむね好意的な意見、励ましを受けてきました。また、展覧会を見て入会した会員も増え、大変うれしいことです。

デジタル写真が賑わい、カラー写真、ドキュメンタリーフォト、コンポラフォト、最近では古典技法による写真まで出てきているのが現在の写真の状況です。我々は、アダムスから多くの事柄を学び、そこから写真の美しさとは何か、ファインプリントとは何かという一貫したテーマを自ら行動することによって追究してきています。我々のようにアダムスにこだわり、展覧会まで立ち上げたグループは他に無いと思います。特別な存在だと思います。それだけに我々は答えをきっちりださなければなりません。たしかに難しいことでもあり、やっかいな問題もたくさんあります。だから面白いと私は考えます。年に何回か行われる撮影会に同行していて、私はときどき会員の皆さんの写真に対する情熱にしばしばうたれます。細江英公は過去に私にこんなことをいっていました。'君、写真に対する愛があるかどうかだよ' 会員の皆さんの写真に対する情熱に期待し、展覧会をすばらしいものにしたいと思いま

す。

四国・竜串の撮影会で有機的な海岸風景を眺め、八ケ岳のペンションでは身近な物にカメラを向け、また渓谷に樹勢する植物に、真夏の植物の生命力を見ました。このように我々の素材は様々です。

今回の写真展も素材の制限はありません、ただ素材に不偏的な美しさを感じたか、形に新たな発見があるかを求めます。いえることは、風景にしてもできるだけ近づくこと、また物をよく見ること、台所の鍋や皿にもおもしろい形がかくれている。そしてカメラが見るように見ること、ピントグラスは別の世界に見えるのです。物はそれ自体で美しい。光だ、形だ、個性だといって素材をだめにしていませんか？？ “物をはっきり、くっきりさせること”これはカメラがもっとも得意とするところ、ここからスタートしてみる、そしてシャープで豊かなバリューをもったプリントに時間をかけて仕上げてください。皆さんの素晴らしい写真を求めます。

ゾーンシステム研究会代表 中島秀雄

竜串撮影会雑感

５／１５　６：４０羽田に着いた。平日とはいっても、団体客が目につくあいかわらず混み合うロビーだ。 古川、管野、斉藤、諸見里、そして中島の５人がそろった。搭乗前にいつもの仕事がまっている、手荷物検査のＸ線からフィルムを守ることだ。まるで自らの臓器によけいな負担をかけないようにする かのようである。紐をほどきフィルムのケース、フォルダーを出す。この程度で済むのだからよしと する。再び荷物を組直し機内へ。上昇してまもなく四国の天気が入った。曇から雨のアナウスだ。

１０：２０分高知に到着した。十人乗りのレンタカーに５人の我々は十分に余裕があった。町中を迂回して海岸線に出る、すっかり田植えの済んだ田園が続き、前回の撮影地でもあった庄内平野によくにていた。その中で奇妙な物を目にした。空港に近いこともあるのか、戦時中に使われたと思われるトウチカが、回りの光景とは異質な形態をさらしていた。中は薄暗く、今は農家の倉庫になっている。異質と言う意味では写真の素材になりうる、しかし美しくはない。海岸にそって２時間も走ったが、面白い光景に出会うことはなかった。ただ四万十川には引き付けられるものを感じた。山に囲まれ、ゆったりと流れる豊富な水、この水はいったいどこから湧き出るのか、険しい渓谷、多くの滝、天然自然の雄大な光景、そんな上流までいつか行ってみたい。過ぎていくをしばらく眺めていた。竜串まではもうすぐだ、携帯デンワの感度がよくない、民宿のおばちゃんの元気な声がときどき消える。

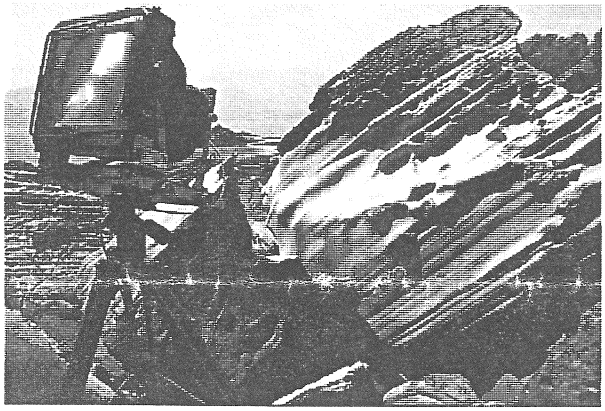
３時１５分予定より１時間早く着いた、諸見里氏のスムーズな運転が大きい。海に面した自壁の民宿だ。器材を隆ろし、宅急便で雇いた荷物といっしょに、２階の大部屋に運び込んだ。海が見える眺めのいい部屋だ。一息して我々はロケに出た。情報どうり海触、風触による変形した岩場、巨石、峰の巣模様が延々と続く。雨が隆ってきた、宿で借りた傘をさし遊歩道をいそいだ。

５／１６雨の音で目がさめた。この雨では外は無理だ、何か写真になるものを見つけよう。玄関に蝶

の標本があった、これを部屋に持ち込むことにした。宿の回りには大きな玉葱がころがっていた、これだ、これを撮影しよう。‘畑にあるから好きなだけ取ってきな、へんなものに興味があるのう！’台所でおばちゃんの声がした。雨で畑の土は軟らかく、玉葱は簡単にぬけた。細い根も茎もある取り 立ての玉葱。隣の畑にはタバコが植えられ、大きな葉が写真になると思った。部屋の窓は広く光は十分だった。午前中これに集中した。王葱は何回撮影してもこれでいいとはならない不思議な光とつやをもっている。雨は相変わらず降りつづけ、海岸の撮影はあきらめ、足摺り岬までロケにでることにした。岬への道の両側にはシダが群生していて、雨がなければ確実に写真にしたかった。雨は激しくなり車から出るのもいやになる。唐人石にも寄ってみた。自然に出来た巨石郡が圧倒的で、古代人がこの石を利用して動物を捕まえたという。断崖絶壁に立つレストランで昼食にした。大波が岩にぶつかり砕ける様子が、大きなガラス窓から見える。そうだ、ここは台風銀座の真ん中に位置する場所だ。窓枠にも風よけの工夫があった。幾度となく激しい波にさらされた岩礁は黒くくすんでいて、だれ一人近づくことを拒否しているようにも見える。岬を象徴する白い灯台も、荒れ狂う自然の猛威にいくどとなくさらされたにちがいない。車に戻るころ、雨は小降りになっていた。雨で何もできない我々にとって出来ることといえば、物をじっくり見ることぐらいだ。宿に戻る前に、海のギャラリーに行ってみた。薄暗い館内は、展示レイアウトに問題があるものの、世界の様々な貝にしばらく見とれた。出口に変なものを見つけた。ブーズー・ドール（Ｖｏｏ　Ｄｏｏ　Ｄｏｌｌ）、これはある種の魚の千物をうまく組み立てると、魚のお化けの形になるもので、アメリカの写真家ジャック・ウェルポットの写真集にものっている奇妙な被写体、長いこと私にとって謎になっていた。この実物が展示してあり、写真の謎がすこし解けた。土産用の貝の標本にも興味をもった。既製の箱にていねいに並べた様々な貝を見ているだけで、作った人の気持ちが伝わってくる、５箱も買ってしまった。値段もすごく安い。諸見 里氏も時間をかけて素材を選んでいた。

５／１７　４：３０外は明るく、快晴だとわかった。誰もがこの日をまっていた。朝食前の一仕事、カメラを担ぎ皆思い思いの被写体にカメラを向けた。海岸は引き潮で様子はだいぶ変わっていた。今日は、前日予約したボートに乗って見残しへ行くことになっている。食事も早々とすませボートへ向かった。真っ黒に日焼けした漁師が我々を迎えてくれた。水しぶきをあげながら２０分程走った入り江にボートはすべり込んだ。危ない遊歩道を進み、最初のポイントにカメラを降ろした。いくつかの撮影ポイントを見つけ、それぞれがカメラをセットした。斉藤氏は早めに切り上げ次のポイントに向かった。古川氏はポラを使って入念に確認し、菅野氏も長くこの場所にこだわっていた。諸見里氏は前日の雨で 濡れた岩が気に入らず、乾くのを待つというこだわりで、皆、それぞれ撮影に入り込んでいる。陽は 高くまた強かった、この光が、被写体にとっていい場合もあるし、ダメな場合もある。できるならもう少し柔らなかな光であって欲しかった。昼近くボートが弁当をもってきた、波があって岩場にボートを付けるのが難しい。タイミングをみて手渡した。

菅野、古川、諸見里氏と中島の４人が集まり昼食にした。お互いの真っ赤な顔を見て笑った。斉藤氏は屏風岩をねらいに行った、たしか午前中の光がいいと言っていた。ここから屏風岩までまだかなりある、私は見残しすべてを写真にするのは無理だと考え、カメラを置いて行けるところまて歩いてみることにした。途中の屏風岩で菅野氏が頑張っていた。そして遊歩道のなくなった岩場をずっと歩いた。以前、助手の頃三浦海岸を何回も歩いたことがある。Ｐｇｉでの個展の何枚かはそのときに撮影したものだ。この海岸も細かく見ていくと、素材はいくつもあるように思えた。鋭くかけた岩、滑らかな石の集合、石切り場のような岩場、貝が貼り着いた一枚岩、しかしどれも柔らかな光が欲しかった。戻る途中岩陰に面自い石を見つけ、カメラをセットした。絞りｆ３２で一枚撮り、もう一枚撮ろうとしたら諸見里氏が声をかけてきた。そろそろ切り上げましょう！！この一言にほっとしたのか、一枚で終わりにした。後になってなぜｆ３２で撮影したのか悔



やむことになる。時間は４時半を回っていた。我々はすでに７時間以上いたことになる、気がつくと皮膚はすっかりやけど状態だった。宿に電話してボートを回してもらった。西日を受けて走るボートの水しぶきに、日焼けした顔が痛かった。

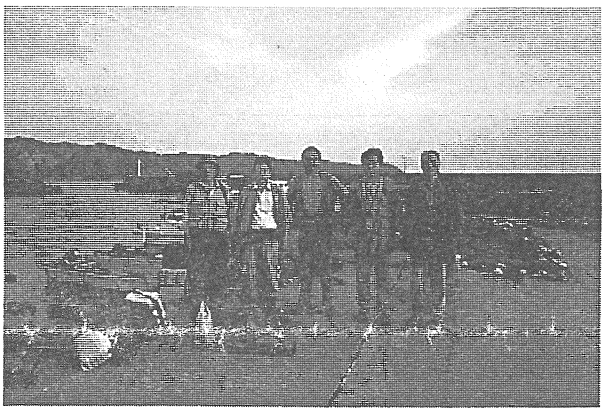
５／１８　屋根からしずくの鈍い音が明け方から聞こえ、外を見なくても雨だとわかった。帰宅する荷物をまとめ始めた。カメラもフィルムも安全に送ることが出来るので、撮影済みのフィルムも送ることにした。私は、雨が少し上がったように見え、カメラを外に持ち出し、タバコの葉にカメラを向けた。タバコの葉をこれほど真近に見たのははじめてだ、幅２５センチ、長さ６０センチもある大きな 葉の表面に水滴が付着し、葉の生命力を写真にしたいと思った。風がときより葉をゆらす、ゾーンⅣ、Ⅴ、Ⅵ、明るいところはゾーンⅦに来た。ｆ４５、１／２秒で撮った。済藤氏もカメラを向けていた。風もあり、雨も少しあってうまくいくかわからなかったので皆に積極的に奨めることはしなかった。本来なら葉を一枚失敬して部屋で撮りたいところ、タバコの葉となるとそうは行かない。

小雨の中、空港へ向け早めに出発することにした。沿道の川は、連日の雨で水かさを増し、濁り水を湧き出すような勢いで流れている。帰りの車は静かだった、眠る者もいた、休憩のため、四万十川 に立ち寄った。屋形船に客を乗せ船頭が縄をほどいている。観光バスから掃き出された客が、つぎつぎに川原へ下り、記念写真を撮って船に乗り込んでいく、誰一人として逆らうものはいない、大きな 声で喋る者、大笑いする者、時より船が揺れ高い声がする。大陸のように、水はゆったりと流れ、この流れに、三船が岸をはなれた。この光景をじっと見ていて飽きなかった。この一連の光景の気持ちよさは、同じ時間で表現される映画のワンシーンだと感じた。同時に、我々のめざす写真の気持ちよさとの大きな違いを、自分の中で感じた。写真は、状況の説明や前後の時間の流れから独立している。また、光や天気に左右されるやっかいな仕事でもあり、それだけに粘り強さが必要だ。

今回、四国はまだ多くの被写体があることを目にした、これは大きな収穫だった。皆さんお疲れさまでした。

‘写真を追究する道はリアリズムによるしかないと信じている、しかもそれが大変困難なやり方であることもわかっている’エドワード・ウエストン

中島秀雄



（表紙含む、４点の写真　中島先生撮影）

連載

ゾーンシステム・テクニカルアドバイス

中島秀雄

定着・水洗

写真はいずれ変色してしまう！？２０年以上前、銀座のギャラリーで細江さんがオリジナルプリント展を開いた頃、変色という古くて新しい問題を克服しなければならなかった。定着と水洗が大きなポイントだということはわかっていた、しかしどうすれば完全な定着、水洗ができるのか当時はよくわからなかった。定着は現像で、金属銀に還元されなかったハロゲン化銀を取り除き、画像を安定させるための処 理である。現像が終わった印画紙中には、未感光、未現像でハロゲン化銀が残留していて、これを取り除く必要があり、これが定着行程であり、その処理液が定着液である。

定着液の成分

薬品名	意味・機能
チオ硫酸ナトリュウム（ハイポ）	ハロゲン化銀溶解剤
無水亜硫酸ナトリュウム	ハイポの分解、沈殿防止
酢酸、ホウ酸	現像作用の停止、有機酸と塩による緩衝液
カリミョウバン	ゼラチン膜を硬膜し、キズ、乳剤のハガレ防止

一般的な定着液では、フジの酸性硬膜定着液、コダックＦ５がこれにあたる。通常の使用にはこれで十分である。このほかに以下のものがある。

・単ハイポ定着液

チオ硫酸ナトリュウムと無水亜硫酸ナトリュウムのみで、現像停止作用はないが、定着作用は早く、水洗効率も非常によい。アダムスは２回定着の後、この単ハイポ定着を使うという。（三回定着を実行している）

・酸性定着液

チオ硫酸ナトリュウムとメタ重亜硫酸カリュウムを成分とするもので、現像停止作用があり、硬膜剤を含まないので水洗効率はよい。硬膜作用がないためフィルムの使用には避けたほうがよい。

・迅速酸性硬膜定着液

チオ硫酸アンモニュウムを主成分とし、定着作用が早い。印画紙の完全定着を目的に使う人もいるが、減力作用もあり私は奨めない。以前フイルム定着に使用していたが、今は通常のものに変えた。

定着方法

二浴定着の奨め

定着不足は変退色の大きな原因となり、ファインプリントの目標でもある長期保存のためには完全定着が必要である。その手段として二浴定着法がある。定着を二回にわけて処理する方法で、同じ種類の定着液でよい。指定定着時間の半分を第一定着で行い、残りの半分を第二定着で行う。たとえば指定が６分なら第一定着で３分、第二定着で３分となる。第一定着の処理でほとんど定着は進行する。停止の終わったプリントを第一定着に入れ、攪拌する。１分後にビューイングライトを点灯し、プリントの調子を確認する。定着オーバーにならないように、その場から離れないことが大事だ。一度に６分の定着時間では長すぎて定着からつい離れてしまう、気がつくと定着オーバーということになってしまい、定着ムラや画像銀が溶解してしまうことになる。二回定着はそれを防ぐことにもなる。時間が来たら暗室作業が終わるまで、流水の中に入れておく。このときプリントの量にもよるが、水は時々全部入れ替えるのがよい。溜めてある水の場合は、４枚のプリントが入ったら、全部の水を入れ替えることでもよい。水の中にハイポが蓄積され、弱い定着が進行してしまう可能性がある。尚第一定着液は指定使用量の７０％をめどに廃棄して、第二定着液を第一定着に入れ替え、新液を第二定着として用意する。また何枚のプリントが定着液を通過したのか、メモ用紙に記入しておくことが大事だ。第二定着は第一定着にくらべて疲労しないため、完全定着にとっ

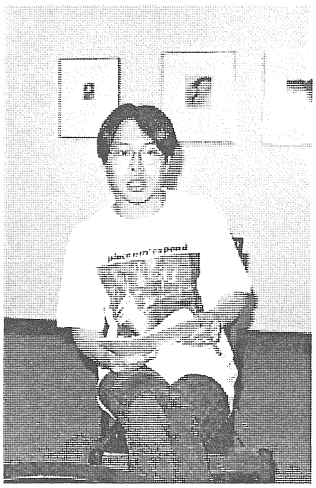
て有効なものとなる。すべての暗室作業が終わったら室内灯を付け、第二定着に入る。明らかにダメプリントがあれば捨てるか別にしておき、すべてを第二定着することもない。ためしプリントやテストプリントは捨ててしまうこともある。水の中から、プリントを５枚程度水をよくきって第二定着液に入れ、攪拌する。時間が来たら液をきって流水に入れる。定着液の温度も重要で、チオ硫酸ナトリュウム(ハイポ) は液 温に左右されやすい。１６℃の定着時間は、２０℃の２倍を必要とする。

処理	薬品	時間	温度	方法
第一定着液	酸性硬膜定着液（フジ、Ｆ５）	３分	２０±３℃	停止の済んだプリントの液をよく切って、定着液に入れ攪拌する。１分経過したら、ビューイグライトを付け、調子を見る。コンタクトプリントやテストプリントと見比べ、プリントレシピに気が付いたことをすべて記入する。ピント、コントラスト、基本露光、ドジング、バーニング等、隅の方もよく見る。このプリントは、定着時間３分を越えてしまうかもしれないこれはワークプリントでいたしかたない。けっしてファインプリントにはならない。アメリカの写真家はレシピに記録したら、このプリントは捨ててしまう。次のファインプリントは３分を守ること。
中間水洗	流水			作業がすべて終わるまで、流水の中に入れておく.プリントの量にもよるが、時々すべての水を入れ替える。定着液が次々と入り込み、弱い定着が進行する可能性がある。流水が不可能な場合は、プリントが４枚入ったらすべての水を入れ替える。
第二定着	酸性硬膜定着液（新鮮な液）	３分	２０±３℃	すべての作業が終わり、暗室のライトを付け、第二定着に入る。明らかにダメプリントやテストプリントは捨てるか別にしておく。大四のトレイに３Ｌ程の定着液を入れ、水をよく切ったプリント５枚を入れ、よく攪拌する。折れ、曲がりに注意しながら進める。時間が来たら、液を切って流水に入れる。大四のトレイでは５枚以上は正確に定着はできない。

次回は水洗

ルース・バーンハート
&イモジン・カニンハム写真鑑賞会

研究会の活動の一つでもある写真鑑賞会の二回目が、6/20日東京赤坂の東京写真文化館で行われた。二人の写真家の展覧会はすでに開かれて二カ月にもなることから、会員の参加は写真のように６人でしかなかった。キューレターの篠原氏からレクチャーがあった。イモージンは１９０３年ワシントン大学の写真化学を学ぶかたわら、写真を撮ることにも興味を持ち始める。通信販売でカメラを購入し、風景でもなく、ポートレートでもなく、キャンパスの芝生の上でセルフヌードを撮影し、大きな問題になってしまったこと。しかし、この作品が彼女の写真家人生を決定づけることになる。そしてその後も自分の夫をモデルにヌード作品を制作したり、二重露出、芸術家のポートレイトを撮影した。カリフォルニアに移り住んでからは植物に強い興味をもちはじめ、それらの個性を人間が被写体である場合と同じように思いやりをもって捉え、あの有名なマグノリア・ブロッサムがその時代に生まれた。オークランドに移住してから撮り始めた植物の写真が生涯で最も出来のよいものだったと晩年に語っている。



１９３２年には、ウエストン、アダムスらと共に、ストレート写真を追究するｆ／６４グループを結成し、ド・ヤング美術館でグループ展を行う。カメラは４Ｘ５からはじまり、３５ｍｍ判、６Ｘ６判も使いこなし、美術学校で写真を教え、また各地で展覧会が行われグッケンハイム奨学金も受ける。「いつの時代も写真理論を書き立てる人にはこと欠かないでしょうし、写真理論を読むことも結構でしょう。でも私はいつも、実践の人であり続けるでしょう。」現在、イモージン・カニンガム・トラストが作品を管理保存している。

様々な素材に目を向けるイモージンとは違い、ルース・バーンハートは、ヌードと静物の二つを生涯に渡って追求した写真家だ。ドイツに生まれ、大学を卒業後にニューヨークに渡った。父親がグラフィック・デザイナーだったことから、広告写真の仕事をすることになる。しかし、彼女にとってカメラ業は退屈だったようで、自分で誇りに思えるような仕事がしたくなり、キャンディーを買って写真にしたところすばらしいものができた。光の使い方、並べ方、形に気をつけたといっている。この写真が自立する写真家になるヒントになった。もともと、貝殻、石、人形、動物の骨などを集めるのが好きだったところから、身の回りにあるものを撮影するようになっていく。車に退かれた食器も道路で拾ってきた。同時にヌードを題材にした作品を撮るようになる。ヌードと静物には差はない。「私は女性であり、女性はどういうものかをしっているからである。男性は女性を魅力的なものとしてとらえるから、それが写真に出てしまう。だから男性は私と同じ写真は撮れない」といっている。自然がもつ形の美しさを、シンプルかつストレートにうたいあげることが彼女の作品のスタイルのように感じられる。「私にとって写真とは詩や音楽にも似た、押さえることのできない衝動から生まれた一つの解答である。自分で作り出す静物写真よりも、はるかにこのヌードによって自分の目指す目標に近づいていた。体の持つ弧と量感、それに内に秘める精神と均衡を示すことが私のゴールである」

９０歳を越えてた今でも、好奇心はかわらないと

のこと身近な物に対する強い好奇心に驚く。そして、そこには多くの困難があったと思うが、それをを乗り越え、粘り強く続けてきた意思の強さに圧倒される。しかし、二人の作品には、美しさとやさしさと、そして、ユーモアさえ感じ、見るものをほっとさせる。

私が助手時代、細江英公氏はアダムスのワークショップに招かれ、その時にイモジンに会っている。とても気さくなおばさんだ、といっていたのが印象として残っている。もともとイモジン・カニンハムは、日本では少し難しい写真家だと思われている節があり、実は私も写真集は一冊しか持っていないのです。１９８５年、Ｐｇｉで行われた展覧会でもマグノリア・プロッサムだけは強く印象にあって、今回の展示のようなイメージの広がりは持てなかった。広い視野で彼女らを見ることができたのも、研究会の今までの写真活動によるところが大きい。なぜなら見る側にそれなりの感性を求められる作品だからだ。そして、見ることを仕事にしている我々は、もっと見なければいけないことをこの作品展から改めて学んだ。　　中島秀雄

この項写真撮影　篠原

Information

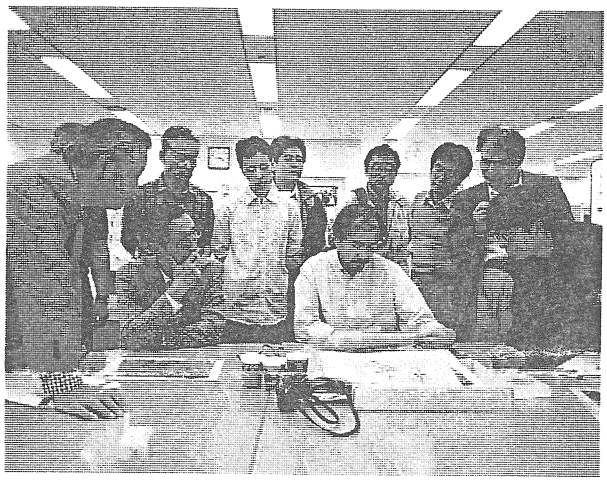
<<売ります・買います>>

ELニッコール　80mm　f5.6　新同品　¥10,000.
フジノンW　210mm　f5.6　　中古　　¥20,000.
その他小物
ビューイングフィルター
メーターホルスター
ゾーンラベル（ペンタックスデジタル用）など

中島秀雄

<<例会に参加しよう！>>

あさっての方を向いている人がいないでもないような、、、(^^;　それはともかく、真剣な定例会のひとこま。　　（篠原）



＜原稿募集＞

会員の皆様からの原稿を常時お待ちしいます。
情報お待ちしています！　（篠原）